

研究テーマ	前橋の礎・製糸業の記憶
研究者・団体名	前橋絹文化研究会
研究要旨	上毛かるた『県都前橋 生糸(いと)の市(まち)』で知られる前橋市。その礎となった絹産業、絹の歴史・文化を多くの人に知っていただくため、前橋の街中を歩いて紹介する「まち歩き見学会」(3コース)を実施しました。そして、前橋の絹産業を紹介するための良き素材を得るため、今年度は同じ蚕糸業で栄えた「蚕都上田」を尋ね、前橋(群馬)との関連、比較を行いました。その成果は前橋の絹産業を理解する上で大いに役立ちました。 当会は今後も引き続き前橋の絹文化の発信・周知に務めてまいります。

研究内容

1 前橋の絹産業 まち歩き見学会

(1) リハーサル(解説研修)

- ・5/14(西エリア) 会員 5名 (講師 織都桐生案内人の会) 1名 計 6名
- ・6/11(東エリア) // 5名 ( // 世界遺産伝道師協会) 1名 計 6名
- ・7/9(南エリア) // 6名 ( // 大胡歴史研究会) 1名 計 7名

(2) まち歩き見学会(公募<定員各コース 20名> 2班編制)

- ・5/28(西エリア) 一般参加者 17名 会員 7名 計 24名
- ・6/25(東エリア) // 17名 // 7名 計 24名
- ・7/23(南エリア) // 23名 // 8名 計 31名



<5/14 リハ西 松陰短刀>



<5/28 西 器械製糸場跡>



<6/25 東 奈良煉瓦倉庫>



<7/23 南 箸蔵>

2 学習会(講演)

- ・8/6 演題: 初代前橋市長 下村善太郎と善右衛門  
講師: 下村洋之助氏(下村善太郎の御子孫)  
出席者: 会員 10名 世界遺産伝道師協会会員 8名  
まち歩き見学会参加者 6名 合計 24名



- ・11/19 演題: 風穴について  
講師: 飯塚聡氏(埋蔵文化調査事業団)  
出席者: 会員 10名



### 3 見学会

- ・9/24 下仁田町（下仁田町歴史館、中小坂鉄山跡、春秋館  
荒船風穴跡）＜宮城郷土史会合同開催＞  
出席者：会員 7名



- ・10/25 長野県上田市（旧常田館製糸場、旧上田蚕種協業組合  
信州大学繊維学部講堂・資料館、丸子郷土博物館  
カネタの煙突、別所温泉氷沢の風穴、小岩井油工房  
（上田紬）、藤本蚕業歴史館）  
出席者：会員 11名



### 4 その他（会議等）

- ・4/16 第1回運営会議（総会）
- ・10/10 第2回運営会議
- ・1/7 第1回役員会議
- ・1/15 第3回運営会議
- ・2/18 絹ラボ研究成果発表会

※ 昨年度制作した「まち歩きまっぷ」(今年度一部修正・増刷)に加えて、今年度は各コース毎のエリア解説パンフレット「前橋の絹産業 まち歩きガイド」を作成しました。

### 5 今後の予定

次年度もこれまでの活動の成果を踏まえて、前橋の絹産業・絹文化に関する発信・啓蒙活動に取り組んでまいります。次年度の予定概要は次のとおりです。

#### (1) まち歩き見学会

今年度同様に3コースを各1回実施。解説は一層のスキルアップを目指す。

#### (2) 学習会（講演会）

会員等の学習を目的に前橋の絹産業に関係する方の講演会を開催する。

#### (3) 見学会

会員の知見拡大と親睦を目的に県内外の蚕糸業関係施設を見学する。

前橋市内、県内（伊勢崎方面）、県外（長野県諏訪・岡谷方面）

#### (4) シンポジウム

当会と同様の活動（絹産業等の案内）を行っている団体との交流・意見交換行事を開催する。

#### (5) 会員拡大

当会の活動に賛同し、自らも絹産業・絹文化の知識向上をめざす人材を発掘し、本会の会員拡大に務めていく。

【蚕都上田の蚕糸業を見学して（群馬県・前橋市との関連を踏まえて）】

＜参加会員分担執筆＞

1 旧常田館製糸場（笠原工業（株））



旧常田館製糸場は明治 33 年(1900)創業の製糸工場である。製糸工場は蚕の繭から生糸を作る工場でお湯で煮て柔らかくした繭から糸を引き出している。煙突付きのボイラーで湯を沸かし、繭蔵から繭を出庫し、繰糸器械を使って糸作りが容易になった。昭和 59 年(1984)に時代の流れで製糸業は終了したが、現在は笠原工業事務所のある繰糸棟には、今でも湯気抜きの小屋根が乗っている。構内にはこのような旧笠原組常田館製糸場時代の建物が維持されており、そのうち何と 7 棟が平成 24 年(2012)に国の重要文化財に指定された。なかでも国内最高層の木造 5 階建て繭蔵庫や大正時代末の鉄筋コンクリート 5 階建て倉庫群などは製糸技術が発達した時代の先人達の工夫と知恵の足跡が歴然と残る貴重な文化遺産でもある。

NPO 法人絹の文化・蚕都常田館製糸場として、笠原工業株式会社の委託を受けて産業遺産の公開を一般にも行っている。施設は笠原工業株式会社の用地社屋であるが、富岡製糸場の世界文化遺産登録が注目されるようになったので見学者が近年多く訪れるようになった。昭和天皇、皇后両陛下は昭和 39 年(1964)5 月 15 日に国の重要産業蚕糸業の常田館製糸工場をご視察した。また平成天皇、皇后両陛下は平成 28 年(2016)8 月 23 日に国指定重要文化財笠原工業旧製糸場施設をご視察された歴史のある貴重な建物である。

明治以降、生糸輸出が国を支えるようになり、上田城下は鉄道の敷設と共に駅を中心とした近代的な町へと変化した。養蚕はいよいよ盛んになり常田館も大規模な製糸場が操業し、その建物が現在でも現存しているのには驚くばかりである。現在は「重文 常田館製糸場」の名称になって蚕都上田の象徴にもなっている。

（記 奈良 孝美）



国重要文化財の大正時代の 4 階建鉄筋コンクリート製繭倉庫、国内随一の 5 階建木造繭倉庫が保存維持され、史跡として公開していることに感動した。製糸機が保存されていないことは残念であるが、施設はよく手入れされ歴史を感じることができた。施設を保存するには、費用がかかるが、国、市の補助金は当てにならず、常田館製糸場は笠原工業の業種転換で発泡スチロール保管に利用され笠原工業グループの援助が保存できた一因である。このことは、富岡製糸場の維持に片倉工業が担い、保存できたことが世界遺産につながったことと同様である。

前橋の製糸業は製糸が衰退した後に続く産業がなく、業種転換もせず、規模も小さいため、廃業後、施設を保存する余裕はなく商業テナント等土地利用を行い、製糸施設は解体されてしまい現在に至る。

（記 阿部 典之）

2 旧上田蚕種協業組合



現在、長野県上田市にある上田蚕種(株)は長野県松本市の高原社(株)と群馬県蚕糸技術センターとともに富岡市の小野稚蚕人工飼料育センターへ蚕種の供給を行い群馬県内の養蚕を下支えしている。

上田蚕種(株)で製造され群馬県内に供給される主な品種は、春嶺鐘月、錦秋鐘和、ぐんま 200(群馬県オリジナル品種)の 3 種である。現在(2022 年度春蚕)、群馬県内の養蚕農家の軒数は 55 軒、前橋市内では 14 軒となっている。



数年前までは県内で 100 軒以上の養蚕農家があり、急速な減少傾向にある。養蚕農家減少の理由は、従事者の高齢化、後継者不足による。その背景には、化学繊維の普及や外国産生糸の輸入増大による生糸需要の低迷からくる繭価格の下落がある。養蚕業衰退の原因のひとつ、一番の理由としては従事されている方の報酬が低く養蚕だけで生活していくのが難しいという問題である。このような状況から、生糸・繭の元となる蚕種製造業も衰退傾向にある。こうした状況下、現在も操業している上田蚕種(株)では献身的な生産が続けられている。生糸の品質に関わる繭生産、優れた繭をつくる蚕の成育を大きく左右する蚕種製造は極めて重要な過程で、厳重な衛生、品質の管理等々から出荷時期、経過の管理まで日々徹底した厳しい業務が行われている。

現代日本の礎を築いてきた蚕糸業のなかで、一番のスタート過程である蚕種製造を現在も行われていることに深く感銘を受け、敬意の念を持った。衰退原因の根本的な解決になにかできることはと言っても中々難しいが、今後も上田蚕種株式会社が蚕種製造を継続されていくことを節に願っている。(記 村上 雅紀)



上田は昔から養蚕が盛んであった。特に蚕種の生産では全国でも有数で「蚕都上田」とよばれている。上田蚕種株式会社は大正 5 年(1916)に地元の蚕種家が出資して設立したのが始まりで、現在に至っている。現存する事務棟、採卵室など主要な建物は翌 6 年(1917)に完成した。最盛期には 22 万箱の蚕種を出荷した。

建物は、敷地中央正面に事務所、その奥に検査室・食堂・<sup>さいせいしつ</sup>催青室・貯蔵用冷蔵庫などが配置され、これらを中心に、採卵室の建物が左右対称に 3 棟ずつ並んでいます。また正面入口の上方に蚕をシンボル化した意匠が用いられている。

群馬県内養蚕農家への蚕種の供給は、上田蚕種株式会社、松本市にある株式会社高原社、群馬県蚕糸技術センターの 3 箇所から行われている。上田蚕種(株)と(株)高原社の割合は概ね半々である。これらの蚕種は富岡市の小野稚蚕人工飼料育センターを経由して、各農家へ配布されている。主に春蚕・夏蚕が高原社、初秋蚕がセンター、晩秋蚕が上田蚕、初冬蚕が上田蚕種と、両社で互いに調整して供給している。

蚕の品種別供給は上田蚕種と高原社から春嶺鏡月、錦秋鏡和、ぐんま 200 が、技術センターからぐんま 200、新小石丸、ぐんま細、ぐんま黄金、なつこがそれぞれ供給される。

しかしながら、供給元や蚕の品種は確保できているが、群馬県内の養蚕農家軒数は減少しており、2022 年度の春蚕は群馬県内で 55 軒、前橋市内で 14 軒と凋落状態である。ちなみに 10 年前は前橋で 60 軒の養蚕農家があった。そんな中でも、遺伝子組み換え蚕の研究等が行われたが、状況は思わしくないようで、今後の期待はできないようである。また、養蚕農家の高齢化もあり、益々先細りに推移することと思われ、なんとも寂しい限りである。(記 松本 勉)

### 3 信州大学繊維学部 講堂・資料館



ここでは特に蚕糸教育について群馬県の蚕糸教育と対比して記述する。

信州大学繊維学部は、明治 43 年(1910)に設立された上田蚕糸専門学校を前身とし、平成 22 年(2010)に創立 100 周年を迎えている。上田蚕糸専門学校は、日本が工業立国として台頭しようとした明治 43 年(1910)に、蚕糸に関する初の高等教育機関、また長野県下初の国立学校として設立された。その後、繊維科学技術全般にわたる高等教育機関に発展し、昭和 24 年(1949)の学制改革により信州大学繊維学部として発足し、現在に至っている。現在、信州大学繊維学部は我が国に一つしかない学部の特徴を活かし、先進繊維・感性工学科、機械・ロボット学科、科学・材料学科、応用生物学科の 4 つの学科から成り立っている。

さて、群馬県における蚕糸教育であるが、群馬大学工学部(2013年より理工学部)は大正4年(1915)に設立された桐生高等染織学校を発祥としており、100年以上の歴史を持っている。群馬大学工学部繊維工学科は、後に高分子工学科に変わっている。現在の理工学部には、繊維関係学科は存在していない。昭和28年(1953)に群馬大学工業短期大学部が色染科第二部、紡績科第二部として開学した。昭和40年(1965)には、紡績科を繊維科に改名。昭和44年(1969)には、繊維科を繊維工学科、色染科を色染化学科に転科。昭和50年(1975)には、色染化学科を応用化学科に転科。平成4年(1992)3月31日廃止。

次に高等学校における蚕糸教育であるが、大正2年(1913)に群馬県立蚕糸学校、昭和23年(1948)に群馬県立蚕糸高等学校となり、唯一の蚕糸科を有する高校教育が行われた。昭和62年(1987)には、群馬県立安中実業高校となった。また、短大相当の専門学校・県立農林大学校には蚕業学科が設置されていたが、平成10年3月(当時農蚕学科)に廃止された。現在は、群馬県内の高校等における蚕糸関係教育は行われていない。

次に後継者育成機関として、桐生繊維大学がある。桐生繊維大学は、桐生地域の繊維業界の後継者育成を目的として、生産から販売にいたる知識の習得をはじめ、日本でも数少ない繊維の専門機関である群馬県繊維工業試験場との連携により、各工程を体験実習することができるカリキュラムが提供されている。各分野の専門講師による講義及び実習や、展示会や工場の視察など、今後の繊維産地「桐生」の人材育成を目的としている。

次に群馬県蚕糸技術センターであるが、特に技術支援係が中心となって、養蚕農家の普及指導、オリジナル蚕品種の製造及び配布、生産物(繭、桑の苗木等)販売、稚蚕人工飼育に関する技術支援、製糸技術支援及び繭品質評価、桑の栽培管理技術、蚕糸技術に関する技術相談、新規養蚕参入者の育成を行っている。

最期に高山社を記述する。高山社あるいは養蚕改良高山社は、明治17年(1884)に設立された養蚕業の研究・教育機関である。巡回教師の派遣と養蚕学校の展開によって、高山長五郎が確立した養蚕技法「清温育」の普及に大きく貢献した。清温育は、温暖育に由来する技法と清涼育に由来する技法を組み合わせた折衷育で、明治中期以降の標準的な養蚕技術となり、蚕糸業発展の一翼を担った。

高山社は明治20年(1887)に本部を移転したが、それまで本部となっていたのが高山長五郎の住宅であり、そこが養蚕技術の研究や伝習の場にもなっていた。その旧宅は高山社跡として国の史跡に指定されており、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産となっている。

長野県と群馬県の蚕糸教育の比較であるが、長野県では大学教育において、現在も繊維学部が存在することが、顕著な特徴である。群馬県においては、大学、高校ともに現在では繊維、蚕糸ともに行われていないが、群馬県蚕糸技術センターがその役割を果たしている。また、群馬県蚕糸技術センターでは、群馬養蚕基礎講座「群馬養蚕学校」を開いて養蚕教育を行っている。長野県、群馬県ともに現在の最新科学技術を取り入れた教育を行って、時代の変化に対応していると思う。

群馬県では、蚕糸技術センターでの取り組み、それから、後継者育成機関としての桐生繊維大学の取り組みは注目される。また、世界遺産にもなっている高山社を有することは特筆すべきことと言える。

(記 渡辺 丈夫)

#### 4 丸子郷土博物館



養蚕製糸王国長野県の丸子郷土博物館は、第1展示室の考古を中心とする依田窪地方の歴史の展示と、第2展示室の丸子の近代機器製糸の盛衰の展示で構成されている。この博物館の歴史は大正2年に丸子小学校の「丸子陳列館」を経て、昭和57年に建物が造られ翌年に開館、平成18年に上田市立丸子郷土博物館となった。

この度の絹研訪問に対し、川上館長並びに倉澤正幸氏の出迎えを受け、1階

で依田社の PR ビデオ（大正時代の写真等）を鑑賞後、2 階第二展示場において倉澤氏の丁寧な説明を受けた。（説明風景；写真参照）

2 階第二展示場は所蔵の上田・丸子地域の製糸、絹糸紡績を語る資料で埋め尽くされている。江戸時代から養蚕や蚕種が盛んな地域で、農家の副業として一軒で桑の栽培から蚕の生育・糸取りまでを行っていたために、「洋式器械製糸」がスムーズに広まらなかったと思われる。

しかし、生糸の輸出が盛んになった明治 22 年、丸子地域で初の足踏式繰糸器による工場が出来たが、それは小規模で、商業取引には不利であった。そこでこの丸子地域で共同結社「依田社」などを中心に洋式器械製糸を取り入れ、その近代化を支えた下村亀三郎、金子行徳、笠原善吉の功績も展示されている。そうした発展を、荷造りの器械や生糸商標、検査の様子、工場での労働者の条件の改善や福利厚生の上向の様子（運動会風景や講習会）の写真も展示されている。大正 12 年にはアメリカ視察団の訪問、そして昭和に入り世界恐慌の影響などを経て太平洋戦争までの栄枯盛衰を詳しく展示している。

こうした製糸業発展による輸出で、アメリカの文化・教育の影響を受け、「依田窪教育会」や「丸子農商学校」等の文化施設もでき、裕福な資金で得た美術品の収集や文化芸術活動等の記録が展示されている。

一方、群馬県立日本絹の里は県の支援等を得ており、訪問者の人数も多く、実物や模型、映像などで、丸子郷土博物館より理解しやすい展示がなされている。それに比べ、前橋市蚕糸記念館は立地条件が良いとは言えず、見学者も多くない。市からの援助が少ないのか、白黒の暗いイメージで、照明も乏しく展示物や説明も乏しい。残念である。

（記 松村 文雄）

## 5 カネタ（製糸場）の煙突



富岡製糸場と糸都岡谷を結ぶ和田峠経由の日本シルクロードにカネタの煙突が位置している。カネタの煙突は大正 9 年（1920）年、金太製糸場（後にカネタ製糸場）のボイラーの煙突として建造された。建造時は、高さ 36.18m、頂上部直径 1.35m であったが、1995（平成 7）年危険防止のため上部三分の二が取り壊された。現在の高さ 11.45 m、頂上部 2.5m、基部径 3.15m、製糸のまち丸子に残る蚕糸業遺産の一つである。

煙突が建造された当時丸子町は全盛期を迎えていて工場の煙突が林立し、その数を数え、従業員は 5,000 人に上っていたといわれる。煙突に使用されたレンガ約 10 万個の木口が現れるように積みあげられている。ドイツ積みされた段数は 536 段である。製作を請け負った諏訪の会社の銘板が残っている。煙突は煮繭に必要なお湯を沸かすために石炭を焚き、その排煙のために建てられたものである。

（記 丸山 磨）

## 6 別所温泉 氷沢の風穴



繁華街の別所温泉から離れた道を少し行ったところに風穴は存在する。夫神岳がそびえる別所温泉氷沢字に三嶋神社があり、その神社を登ったところに風穴が存在する。風穴というと富士山の富岳風穴のような洞窟を想像するが、この風穴は人工的造られたものである。

風穴は蚕の飼育になぜ必要なのだろうか。蚕を飼育するとき、蚕の種を風などの自然条件でそのままにしておくと春先に孵化してしまい、夏蚕や秋蚕を飼育することができない。そこで工夫され、孵化を抑制するために造られたのが風穴であり、それが風穴の役割である。蚕種を低い温度で保存しておいて夏・秋で蚕の種を孵化させて、どんな季節にも安定的に養蚕ができるように風穴が造られたのである。

氷沢の風穴は縦 7.4m 横 2.9m、高さ 3.6m の石垣を積み上げた堅穴で石段がついている。夏に地上の気温が



摂氏 30 度になっても、穴の中は摂氏 5 度、積み石の間から摂氏 3 度の冷風が噴き出す。まさに天然の冷蔵庫、または天然のクーラーである。

当時塩田平には種屋は 357 軒あり、多くの種屋がここを利用した。風穴は生き物である蚕と蚕の卵・蚕種が一体となった養蚕業にとって重要な役割を果たした。養蚕業が日本の経済を支えた産業であることから風穴は重要な意味を持っている。

一方、群馬県には日本で一番大きな風穴で世界遺産富岡製糸場と絹遺産を構成する荒船風穴があり、養蚕の回数を増やすことによる繭生産の増大に大きく貢献した。なお、風穴に類似し、同様に使用されたものとして、赤城山の地獄谷に赤城の氷蔵がある。明治の方々が山間地に蚕種を運び、目的の時期に孵化させ、その結果が養蚕業、しいては日本経済の発展のために努力されていたことは本当に素晴らしいことだと思った。

(記 栗原 勇介)



「蚕都上田」と称される上田の蚕糸業の中でも、最も特徴的なのが『蚕種業』である。風穴の利用は、夏秋蚕飼育を可能にしたことで、単なる蚕種の一技術でなく蚕糸業全体の発展に大いに寄与した。

氷沢の風穴は、信州の鎌倉と呼ばれる塩田平の西部、別所温泉から 3 kmほど離れた標高 800m の山中にある。車を降りて 7~8 分山道を登ると、石垣の穴 (深さ 3.6m)・風穴にたどり着く。階段で風穴内にも降りられ、その規模、整備の状況に驚かされた。当然、蚕種の貯蔵として利用したときは建屋があったが、今は穴壁面の石垣があるのみである。

この風穴は明治 4 年(1871)に作られ、10 年(1877)には蚕種製造届出に風穴種として出願され、その後発展していく。見学の時、整備された風穴の近くにいくつかの埋もれた風穴跡と思われるものを発見した。文献によると、明治 40 年(1907)には 5 基・蚕種保存可能数量 171,000 枚、翌 41 年には 6 基・268,000 枚とその規模が拡大されていった。これには信越本線の開通で当地と首都圏が直結し、県境を挟んで位置する荒船風穴 (明治 38 年開設) に対抗するかのよう規模拡大が図られたものと想像される。

(記 岩崎 桂治)

## 7 小岩井紬工房 (上田紬)



立派な門構えの古民家に「小岩井紬工房」の看板がかかっている。

小岩井家は江戸時代より蚕種製造業を営んでいたが、昭和 23 年手織り紬の小岩井紬工房を創立。創業以来手織り一筋で上田紬を織っている。現在は 3 代目の若き姉弟、小岩井カリナさん良馬さんが伝統を引き継ぎながら、着物文化の普及にも取り組んでいる。

玄関を入ると左手の和室に上田紬の着物地や帯、財布やバックなど手織りの紬製品が並べられ購入することができる。長野ならではのりんごの樹皮で染めたという淡い色あいの反物が目をひく。格子や縞など意外にモダンな柄も多い。右手の細い廊下沿いに「染め」の工程。染織中の絹糸がかけられている。目立つのはりんごの樹皮で染めた糸。りんごの種類によって色が違い、淡い黄色や萌黄色、柔らかな茶色などがある。アルミの作用でグレーなども染められる。その奥が織場。伺ったとき、作業は終了していたが、良馬さんがきらきら輝く細い糸糸を指先で 8 本さっとすくいとり、まとめて見せてくれた。もともと紬は丈夫な庶民の着物として江戸時代から始まり、くず繭からつくられた真綿から糸を紡ぎ織っていたのだとか。奢侈禁止令が出た江戸時代にも、これは絹ではない、木綿と偽って織っていたときもあった。実際麻糸から紡いでいたときもあったらしい。

有名な大島紬は縦糸横糸とも絹糸を使って織られ、結城紬は縦糸横糸とも紬糸。一方、上田紬は縦糸に絹糸、

横糸に紬糸を使って織っている。

先染めされた糸を組み合わせ、微妙なグラデーションや縞模様、縞模様などを織り出していく。1 反（着物一枚分）織るのに 10 日から 2 週間くらいかかるという。カリナさん、良馬さんも織っているが、織り機を貸し出して何人かの織手に織ってもらってもある（出機一でばた）一反 15 万円くらいと伺ったが、手間を考えると安いのではないかと感じる。しかし、買う方にしてみれば、着物地だけで 15 万円、仕立て代等も考えればやはり高い買い物である。しかし着てみれば、紬の着物は着るほど体になじみ丈夫で長く着られる。

着物を着る機会を増やすことも伝統工芸を絶やさないことにつながる。戦後蚕都上田の伝統工芸として高度成長期には 60 件ほどあった織元も今は小岩井紬工房を含め 4 件のみとのこと。手織り紬の工房に生まれたカリナさん良馬さんも、大学卒業後別の仕事をしていたというが、外から見ることでかえって伝統工芸の魅力に気付いたという。生きた伝統工芸として存続することを願わずにはいられない。

（記 竹下 容子）

## 8 藤本蚕業歴史館



藤本蚕業歴史館は上田市塩尻にあり、そこには、蚕種業等の資料が保存されている。旧蚕種製造施設で、江戸時代から昭和中期までの 2 万点余りの資料や備品を保存展示している歴史館である。塩尻地方はたび重なる千曲川の洪水に泣かされる村であったが、立地的に佐久地方の最も肥沃な土壌が桑の栽培に最適で、その上、岩鼻を通過する強い川風によって、カイコノウジバエと言う害虫を桑の葉から振り落とし、裏山の斜面は日当たりが良いので桑の葉が早く芽吹くことも養蚕に向き、洪水に強い桑を栽培することができたので、この塩尻村の人々は、養蚕で生活を立てるのが最善の方法であったように思われる。その上、塩尻村の藤本善右衛門保右(やすすけ)によって、蚕種にかかわる蚕の病気(微粒子病)に強い青白種を作り出したのも幸いしている。又、群馬の島村の養蚕、蚕種農家群の人々も、過去何度となく利根川の洪水により、川は分断された地域であるが、上州の空っ風と言ひ、日当たりの良いのも塩尻村と良く似ているのである。養蚕、蚕種を行うのに、共に立地条件が備わっており、千曲川や利根川の自然の恵みを生かした塩尻村であり、島村でもある。又、質の良い繭を作るとの信念の元に蚕の品種改良もし、太平×長安で春蚕用、秋花×銀嶺で夏秋蚕用品種を開発したのである。

塩尻村では、藤本善右衛門縄葛(つなね)が続錦雑誌を出し、それは蚕種の桑の葉の拓本、微粒子病の研究など、多岐に渡って書写したもので、全部で 89 冊であった。他にも、藤本善右衛門保右の『蚕(こ)かひの学(まなび)』があり、これは桜の木の版木で印刷された 32 ページからなる蚕の手引書で、各養蚕農家に配ったようである。こうしたことが失敗のない蚕種、養蚕業の向上に繋がったのである。一方、島村では田島弥平が風通しの良い住居兼蚕室で初めて、屋根に換気用の越屋根(やぐらのある窓)を付けて、蚕の飼育法「清涼論」を大成し、普及の為に「養蚕新論」「続養蚕新論」によって、近代養蚕農家の基礎を作り、さらに養蚕(蚕種製造)の貴重な現金収入から生計が成り立っているのも、上田と島村の共通点である。これには先人達の熱心な研鑽と工夫、努力により優れた蚕の育成方法が完成されたことが背景にある。蚕種、養蚕業においては、独特な自然の恵みを生かし、良質な土壌、風通しと日当たりの良い立地的条件の整った環境が必要である。塩尻村、島村、群馬総社などでは、先人達が蚕種、養蚕に対する高い理念と共通のビジョンを持っている。お蚕様によって繁栄し、恵みを受けたと言えるのも、間違いのないのである。

この他にも蚕種、養蚕業を行っている地方には共通点があるかも知れないが、今回の上田視察旅行では、現場に行って、見て、聞いて、触れ、感じて、実に良い機会であった。又、これらの藤本蚕種歴史館の 2 万冊余りの開示と詳細な研究結果が楽しみである。

（記 中野 泰孝）



## 9 全体考察

上毛カルタ「繭と生糸は日本一」は、カルタの作られた昭和 22 年 12 月当時、本当にそうだったのか？図書館で調べてみたら、実は繭、生糸とも長野県が日本一で群馬県は 2 位。群馬県の日本一への願望であった。繭生産で群馬県が継続して日本一となるのは昭和 29 年から、生糸はさらに先のことである。その長野県の中でも『蚕都』と呼ばれ、蚕糸絹業一連の産業が存在した上田市の関係施設の見学を行い、前橋市（群馬県）との関連・比較を行った。分野別に「製糸」「蚕種（風穴含む）」「蚕糸教育」「織物（紬）」の順で記述する。

近代製糸業の幕開けは安政 6 年(1859)横浜開港に始まるが、上田藩はこの時、群馬県嬭恋村出身の中居屋重兵衛を通じて大量の生糸を横浜に送った。また、当時の繰糸最新技術は上州座繰りによるもので、長野県では上田地域にいち早く上州座繰りが導入された。明治 3 年、前橋で日本初の器械製糸が始まると、翌 4 年、上田藩は諏訪形村の宮下理平衛他女子 7 名を派遣し技術を習得させた。しかし、上田は水力に恵まれず器械製糸は定着せず、明治後半まで座繰り主導が続いた。

明治 33 年(1900)諏訪郡平野村（現岡谷市）から進出した笠原製糸（常田館・120 釜）が上田に誕生。明治 44 年(1911)には 924 釜・従業員約 2,000 人となり日本 7 大製糸の一つと数えられた。上田の製糸業を 80 年余り牽引してきたが、昭和 59 年(1984)製糸部門を閉鎖。現在は電子部品や発泡スチロール事業に転化した。繭倉庫等の建物や煙突等を保存、一般観覧に供するなど、創業分野の製糸業には高い誇りが感じられた。なお、笠原工業の方には当会の活動をご理解いただき、当日の見学料を免除していただいた。厚く感謝申し上げます。

製糸関係では他に丸子郷土博物館で、職員から岡谷と並び称される依田社など丸子の製糸業の展示と説明を聞いた。前述の笠原製糸所に先立つこと 10 年、明治 23 年(1890)下村亀三郎の器械製糸場・製糸結社依田社が誕生した。そして、依田社は次々と同盟工場を広げ上田方面まで勢力を拡げていった。依田社は組合製糸ではあるが、養蚕農家主体ではなく営業製糸主体であり、前橋の交水社と同様な性格の組織である。また、交水社が 60 釜の製糸器械を導入した明治 22 年(1889)と同時期であることも親近感を覚える。博物館では製糸用具も展示されておりとても参考になった。次に依田社の加盟の金太製糸場（後のカネタ製糸場）のレンガ製円筒状のカネタの煙突を見学した。現在のシンボルとして残した煙突の高さは実際の 1/3 の 11.25m であるが元々は 36.18m あり、富岡製糸場の現在の煙突・4 代目（鉄製）37.5m、3 代目（レンガ製）約 36m とほぼ同じ高さである。こうした工場の煙突は蚕糸業のシンボルとなっている。昭和 41 年 2 月、前橋の製糸業を牽引する丸登製糸の 2 本の煙突のうちの 1 本(高さ 36m)が強風で倒れた。それは前橋生糸業の末期を告げるかのような出来事であった、と前橋市史は伝えている。

蚕都上田の中でも最も特徴的なものが蚕種業である。見学順序とは逆になるが年代順に藤本蚕業歴史館から話を始める。歴史館は上田市西部のかつて日本有数の蚕種場として知られた旧塩尻村にあり、旧蚕種製造の建物内に蚕種等の資料約 15,000 点を保有している。藤本蚕業（「藤本」は佐藤家の本家が屋号にしたもので本来の姓は「佐藤」）関係者（佐藤修一氏）から時間の許す限り当地区の蚕種業について説明を聞いた。塩尻の蚕種業は寛文年間（1660 年代）佐藤本家の蚕種製造から始まる。文化年間(1804~1818)頃に前橋の高山要七夫妻を招き繰糸技術が導入された。また、開国時に「青白」の育成（群馬県起源説もある）がイタリア・フランスに高く評価され、蚕種の高値に繋がった。その後、蚕種ブームが去った後も塩尻村の蚕種は行商により栄え、日本一の蚕種村となった。

長野県内の養蚕産地で、夏秋蚕の松本盆地、春蚕の上田盆地と言われていたが、繭増産政策として夏秋蚕の普及推進が図られ、それに寄与したのが風穴である。上田地域で風穴蚕種の走りとなったのが、明治 4 年に倉沢運平が始めた別所温泉氷沢の風穴である。とても良く整備、保存されているが、広く知っていただくための案内板や広報がもっとあってもよいと感じた。風穴が広く利用された期間は、冷蔵庫が普及するまでの明治後半から大正期末までの約 20 年間と非常に短い期間ではあるが、蚕糸業の発展には大きな影響を及ぼ

した技術である。

現在も養蚕が続けられているのは、蚕種製造が行われているからであり、上田蚕種株式会社は今も現役の数少ない蚕種業者である。明治中頃から生糸の用途がアメリカの婦人用ストッキングに変わってくると、品質向上や均一性が求められるようになる。また、明治末の一代交雑種の開発により蚕種製造は専門知識・技術及び大規模施設が必要となったことから、大正 6 年に有力な製糸会社の後援する上田蚕種株式会社が設立された。一方、夏秋蚕、多回育の普及の面で、蚕の飼育時期を自由にコントロールできる塩酸による人工孵化が大正 10 年に実用化された。見学会では、原種の飼育から交雑、産卵、人工孵化の手法等蚕種製造に係る一連の作業現場を見学することができた。現在、全国で蚕種を製造しているところはたったの 5 ヶ所のみである。蚕糸の明かりを灯し続けるには、その元である蚕種が必要である。上田蚕種の存続を心から願う。

蚕都上田で欠かせないのが蚕糸教育機関である。今回は信州大学への事前申請により、繊維学部講堂と資料館を大学職員の案内で見学することができた。講堂は昭和 4 年(1929)に建てられてたもので、現在も講演会や入学・卒業式等に使用されているとのことである。外観・内部とも、特に二階席からの眺めや内部の演台や柱には桑や繭・蚕蛾の意匠が施されており、伝統と気品が感じられた。また、資料館は明治 44 年(1911)建造のレンガ倉庫・旧貯繭庫を資料館として、繊維関係の貴重な資料を一般に公開しているものである。信州大学繊維学部は明治 44 年(1911)に開校した上田蚕糸専門学校が始まりで、初代校長は群馬県渋川市出身の針塚長太郎で 27 年間校長として蚕糸教育に尽力された。また、今回は立ち寄らなかったが、大学の近くに明治 25 年創立の小県蚕業学校(初代校長・三吉米熊)を前身とする県立上田東高等学校があり、ともに全国に優秀な蚕糸関係者を輩出した教育機関である。なお、上記講堂に相当するものとして、群馬県には桐生市に大正 5 年(1916)に建てられた群馬大学理工学部同窓記念会館がある。

上田市には絹産業の最終段階、織物業も存在する。戦国時代、上田城を築いた真田昌幸が地場産業として奨励した上田紬である。江戸時代には大島紬、結城紬と共に日本三大紬と称されたほどである。今回は、上記藤本歴史蚕業館と同じ上塩尻にある小岩井紬工房を見学した。紬の羽織を着たご主人が、伝統技術に現代の趣向を取り入れた上田紬(国の伝統工芸品「信州紬」)の制作現場を丁寧に説明して下さった。

最後に上田と前橋の蚕糸業を大まかに比較してみます。蚕種、製糸とも共通して大産地ではあるが、概して蚕種は上田が勝り、製糸は前橋が勝る。また、蚕糸教育については圧倒的に上田に軍配があがる。しかしながら、上田からは蚕種や風穴技術が、一方前橋からは座繰り技術が、それに渋川ではあるが教育者・針塚長太郎が蚕糸教育にと互いに影響し合って両地の蚕糸業が発展していった。また、共に近辺に養蚕地帯が控えており、製糸部門では座繰り中心で器械製糸が遅れたことも共通している。さて、上田、前橋とは状況が異なり、近場にさほどの養蚕地帯がなく、生糸輸出港・横浜まで遠い諏訪・岡谷がなぜ日本製糸業の覇者となったのであろうか。次年度はこの課題をテーマに当地を見学し、前橋の絹産業についての見識をさらに深め、ガイド解説等に活かしていきたい。

(記 岩崎 桂治)